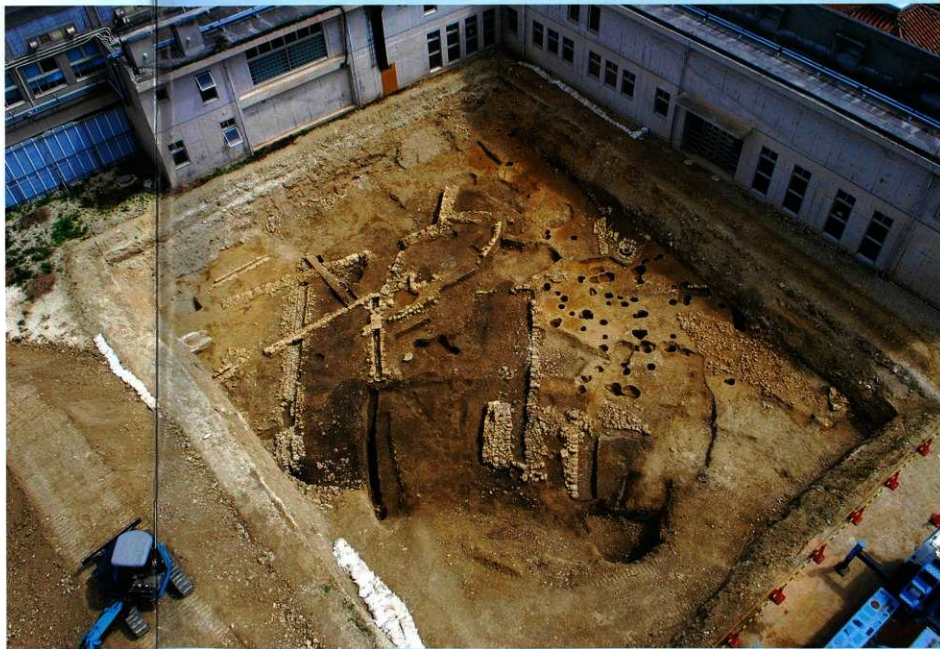


埋蔵文化財発掘調査概要報告

ご さい く しょ あと
御細工所跡



埋蔵文化財発掘調査概要報告

1. 御細工所とは

御細工所跡は那覇市首里真和志町に所在します。琉球王国時代においては真和志村。王国の中樞であった首里城を中心に王府の中樞ともいうべき施設の集中する地域のひとつでした。18世紀初め頃に製作されたとされる首里古地図にその名が見え、現在的那覇市立城西小学校に位置します。

機関としての設置年も含め詳細はよく分かっていませんが、1733年に設置された、国王や王家さらに王府の衣裳や冠をはじめ、壘・かさ・提灯・表具・駕籠・音・硯などの道具類を作る「小細工奉行所」の前身と考えられており、実際1984（昭和59）年に行われた発掘調査では大量のヤコウガイや増埴などが出土しており、その可能性を裏付けています。

この地はその後廃藩置県まで菓草園（上の菓園）として使われ、1900（明治33）年から首里尋常高等小学校女子部、後に首里第二尋常高等小学校として使用されました。またその間、婦人の授産施設として沖縄織工場も併設されました。

戦後、城西小学校が設置されて現在に至ります。

2. 発掘調査について

2014（平成26）年に学校施設の建て替えに際して、既存建物撤去後にに行った試掘調査によって、地下に多数の遺構が存在することが判明し、翌2015（平成27）年、本格的な発掘調査を実施しました。発掘調査は、建て替えを予定している体育館（1地区）部分と幼稚園舎（2地区）部分の二か所、合わせて約1,150㎡の範囲で実施しました。いずれの地区でも先述のとおり現地表下約2mにおいて遺跡の主体となる多数の石組構造物などの遺構

が確認されました。

3. 層序について

今回の調査では大きく六つの層の堆積が確認されました。層序上位から下位へ順に簡記します。

第1層：表土。戦後以降現在までの攪乱層。

第2層：近代から戦前にかけての造成土。

第3層：近世から近代にかけての整地層。

第4層：琉球石灰岩風化土（マージ）の地山。

第5層：琉球石灰岩。発掘区で一部が露頭。

第6層：炭灰層群・微粒砂岩（ニービ）の地山。

上面露頭部分に後述のビット群が作られています。

4. 遺構について

発掘調査においては排水溝、石列、石垣、集石、ビット群、埋め壁などその他多様な遺構が検出されていますが、ここでは特に注目される点について簡記します。

〈1区〉

1区において先の層序や共存する遺物などから大きく三つの異なる時期の遺構面が検出されています。まず上位の第2層に相当する時期の敷石遺構では陶管や一部上面に焼土面が見られることから戦前の首里第二尋常高等小学校（同国民学校）の可能性のある遺構です。第3層以下は概ね近世に相当する層序ですがそれぞれの遺構が重複するかたち検出されていることで遺構の新旧関係がわかるものがあります。

例えば排水溝2は排水溝3を壊してやや上位に造られており、排水溝3より後出のものだと分かります。

本区南側に露頭した第6層に作られたビット群は掘立て建物が存在したことを示すもので近世をさらに遡るグスク時代の遺構の可能性がありま

〈2区〉

2区での石列13と石列14、さらに石垣2は独立した遺構ではなく、ひとつの大きな道路である道路状遺構を構成しています。つまり石列14はこの道路状遺構の南側面、石列13および石垣2は同じく北側面の縁石面であり、このことから本来道路状遺構は綾門大道から緩やかに下りながら御細工所側へ延びる幅約5m、長さ約25m以上にもわたる規模の大きな道路の一部であったと考えられます。

5. 出土遺物について

2016（平成27）年度より資料整理作業を開始し、これまで多くの器物が確認されています。これらの中には外国産の焼き物が多数みられますが、特に中国の龍泉窯などで焼かれた青磁や徳化窯などで焼かれた白磁、同じく徳化窯や景德鎮産で焼かれた青花、さらに中国南部で焼かれた褐釉陶器、華南三彩などバラエティーにとんだ器物が確認されており、また他にタイ産半練土器なども検出されています。これらは概ね14世紀から16世紀にかけて作られたものと考えられます。

国内産（九州・本土）の器物をみても今の佐賀県周辺で焼かれた近世の肥前磁器や印判転写による文様を施した明治期以降の磁器などがあります。

一方、沖縄産では壺屋陶器が多量に出土していますが、その中に「沖繩懸」「工」「校」「城西小

などの文字の入った湯呑碗があり、当時この地にあった首里第二尋常高等小学校・沖縄織工場で使用されたものと考えられます。

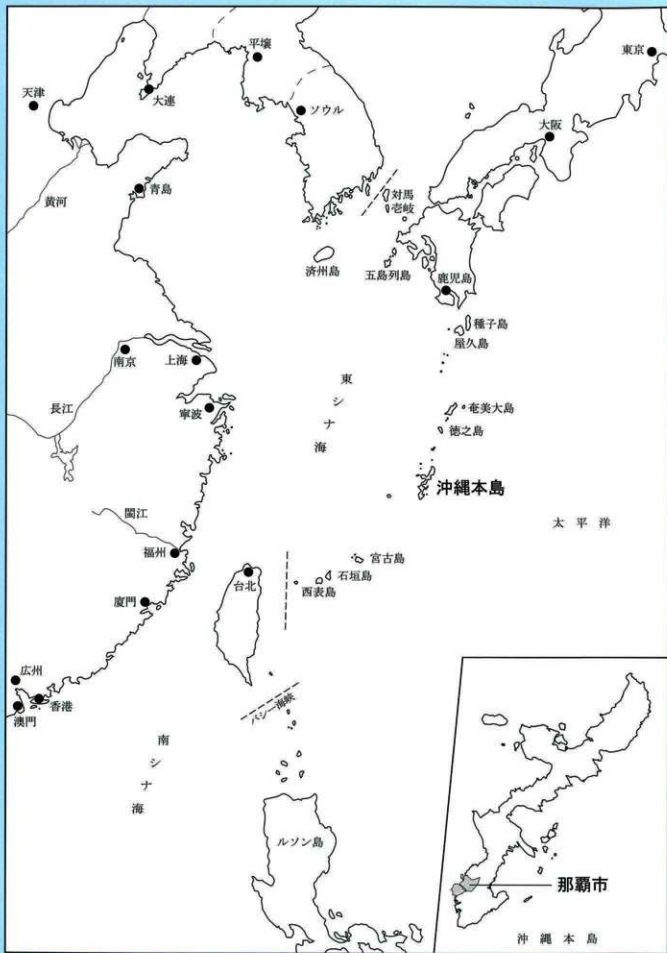
この他に注目されるものとして、穀口近く小さな孔を、あるいは螺背部を大きく切り取ったヤコウガイが出土しています。ヤコウガイは漆器の螺細工に使用されることから、これらもその材料として用いられた可能性があります。

この他にも埴や明朝系瓦など建物や施設に直接関わる遺物や近代頃のガラス製品や硯などの遺物が出土しています。

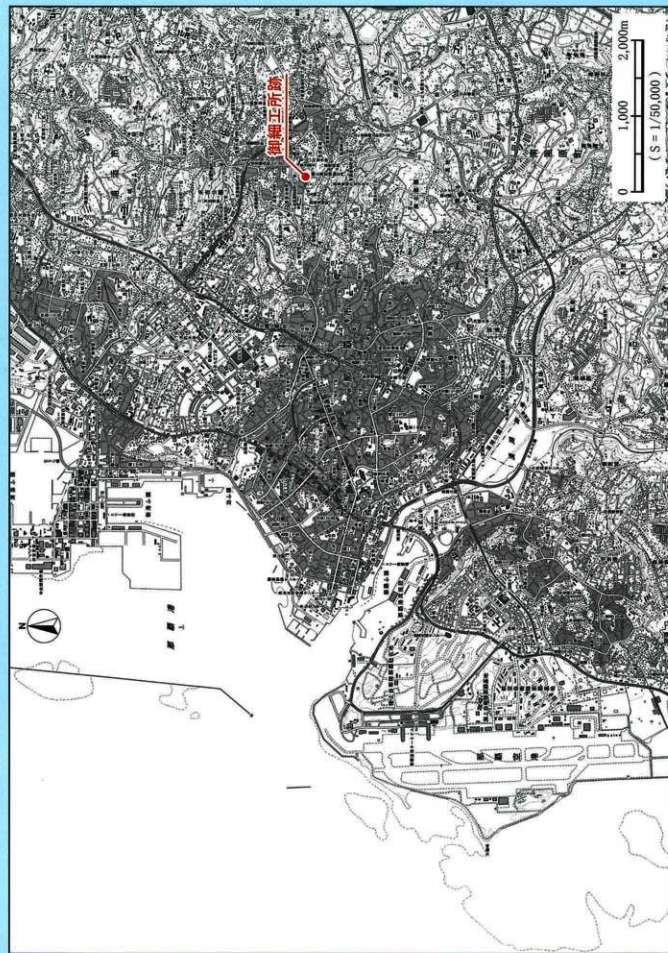
6. 終わりに

この地は、冒頭で触れたとおり首里古地図に記載された当時において、今に伝わる琉球王国の歴史的工芸品・漆芸品・金工品の多くを製作した重要な施設と目される御細工所を擁する場所ですが、今回の発掘調査により、施設の具体的な様子が少しずつわかってきました。また当該期のみならずグスク時代から近代に至る遺構や遺物が得られ、この地の変遷を窺うこともできました。今後より詳細な分析を行って、明らかにしていく予定です。

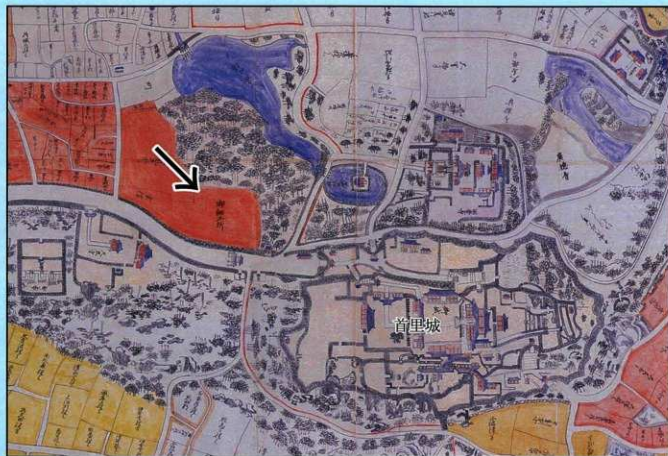
※ 発掘調査地は学校敷地内となっており、学校の許可なく立ち入ることはできません。



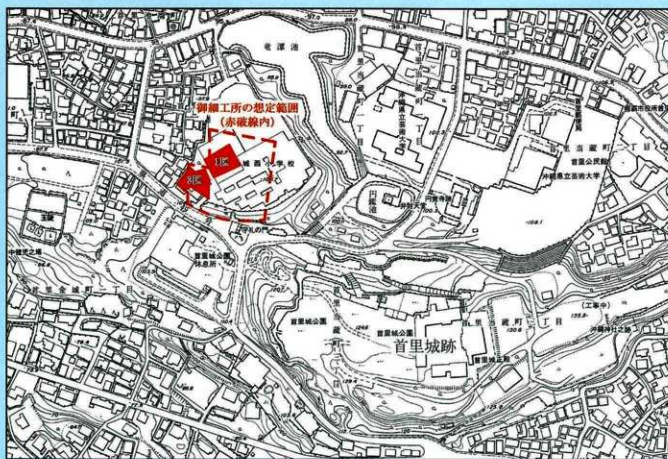
第1図 那覇市の位置



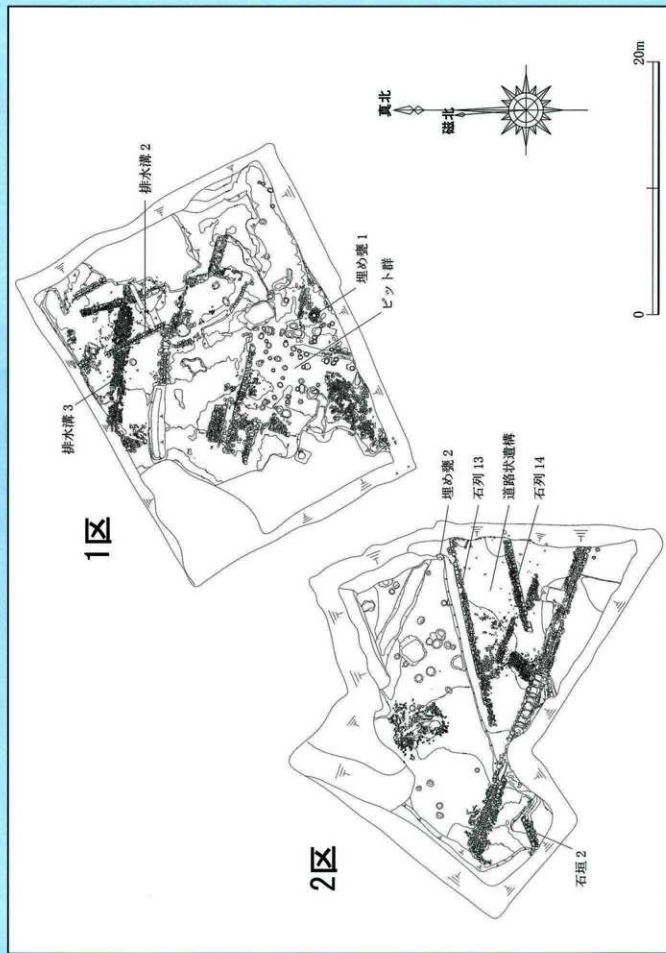
第2図 遺跡所在地



第3図 18世紀初め頃の地図に見る御細工所の位置(矢印)



第4図 遺跡及び周辺地域との位置関係



第5図 遺構平面実測図



御細工所跡から首里城跡を望む



1区 敷石遺構検出状況



1区全景（西側から）



1区 陶管検出状況



2区全景（東側から）



1区 排水溝 2 検出状況



1区 排水溝 3 検出状況



1区 ピット群検出状況



1区 石列 5 検出状況



1区 埋め窠 1 検出状況



1区 石列 6 検出状況



2区 排水溝 7 暗渠蓋石検出状況



2区 排水溝7と道跡状遺構検出状況



2区 石垣2検出状況



2区 排水溝7検出状況



2区 石畳1・2検出状況



2区 排水溝7と石垣2検出状況



2区 埋め壺2検出状況



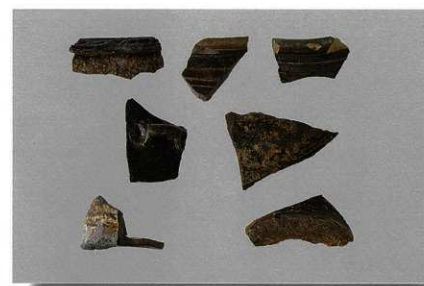
青磁



青花



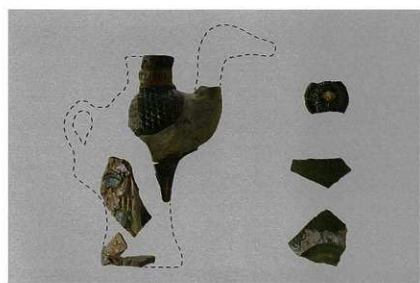
青磁



褐釉陶器



白磁



華南三彩(水注)



明朝系瓦



埴(せん)



陶管

【15】



本土産磁器



壺屋陶器



壺屋陶器

【16】



硯（すずり）



ガラス製品



ヤコウガイ

【17】



発掘調査の様子



現場説明会の様子



資料整理の様子

【18】